

4.11

第1回気楽にクラシック 〜ヨーロッパ音楽紀行〜
〈金〉東京オペラシティ コンサートホール／20時開演（19時30分から解説）
The 1st “Enjoy classic!” Series Friday, 11th April, 8:00 P.M. (Pre-concert talks from 7:30 P.M.) / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 **梅田俊明** 5ページ
Conductor TOSHIAKI UMEDA

ヴァイオリン **川久保賜紀** 8ページ
Violin TAMAKI KAWAKUBO

ナビゲーター **中井美穂** 10ページ
Navigator MIHO NAKAI

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

《憧れの国、スペイン》

シャブリエ **狂詩曲〈スペイン〉** [約8分] 11ページ
CHABRIER / Rapsodie “España”

ラヴェル **道化師の朝の歌** [約8分]
RAVEL / Alborada del gracioso

サラサーテ **アンダルシアのロマンス** 作品22-1 [約5分]
SARASATE / Romanza andaluza op. 22-1

サラサーテ **カルメン幻想曲** 作品25 [約12分]
SARASATE / Fantaisie sur Carmen de Bizet, op. 25

ビゼー **〈カルメン〉第1組曲** [約12分]
BIZET / “Carmen” First Suite
I. Prélude & Aragonaise II. Intermezzo III. Seguedille IV. Les Dragons d'Alcala
V. Les Toréadors

リムスキー=コルサコフ **スペイン奇想曲** 作品34 [約15分] 12ページ
RIMSKY-KORSAKOV / Capriccio espagnol, op. 34
I. Alborada II. Variazioni III. Alborada IV. Scena e canto gitano V. Fandango asturiano

※当公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。*No intermission

[監修] **小林研一郎**（特別客演指揮者）

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[後援] スペイン大使館 Embajada de España

4.17

第536回 定期演奏会
〈木〉サントリーホール／19時開演
The 536th Subscription Concert
Thursday, 17th April, 7:00 P.M. / Suntory Hall

4.19

第7回読響メトロポリタン・シリーズ
〈土〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
The 7th Yomikyo Metropolitan Series
Saturday, 19th April, 2:00 P.M. / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 **シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者） 6ページ
Conductor SYLVAIN CAMBRELING（Principal Conductor）

ピアノ **ニコライ・デミジェンコ** 8ページ
Piano NIKOLAI DEMIDENKO

ソプラノ **ローラ・エイキン** 9ページ
Soprano LAURA AIKIN

コンサートマスター クリスティアン・オスターターク（ゲスト） 17ページ
Guest Concertmaster CHRISTIAN OSTERTAG

シェーンベルク **弦楽のためのワルツ** [約16分] 13ページ
SCHÖNBERG / Waltzes for Strings
I. Kräftig VI. —
II. Nicht zu rasch VII. Kräftig
III. Etwas langsam VIII. Getragen
IV. Etwas rasch IX. Lebhaft
V. Rasch X. Nicht rasch

リスト **ピアノ協奏曲 第1番** 変ホ長調 [約17分] 14ページ
LISZT / Piano Concerto No. 1 in E flat major
I. Allegro maestoso
II. Quasi adagio
III. Allegretto vivace – Allegro animato
IV. Allegro marziale animato

[休憩 **Intermission**]

マーラー **交響曲 第4番** ト長調 **〈大いなる喜びへの賛歌〉** [約52分] 15ページ
MAHLER / Symphony No. 4 in G major
I. Bedächtig, nicht eilen
II. In gemächlicher Bewegung, ohne Hast
III. Ruhevoll, poco adagio
IV. Sehr behaglich

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協力] **アフラック**（アメリカンファミリー生命保険会社）（4/17）

[事業提携] 東京芸術劇場（4/19）

4.26

第165回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈土〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演The 165th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 26th April, 2:00 P.M. / Tokyo Metropolitan Theatre

4.27

第71回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
〈日〉横浜みなとみらいホール／14時開演The 71st Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Sunday, 27th April, 2:00 P.M. / Yokohama Minato Mirai Hall

4.28

第570回サントリーホール名曲シリーズ
〈月〉サントリーホール／19時開演The 570th Suntory Hall Popular Series
Monday, 28th April, 7:00 P.M. / Suntory Hall

指揮 小林研一郎 (特別客演指揮者) 7ページ

Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI (Special Guest Conductor)

ヴァイオリン アレクサンドラ・スム 9ページ

Violin ALEXANDRA SOUMM

コンサートマスター 小森谷巧

Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

チャイコフスキー ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] 18ページ

TCHAIKOVSKY / Violin Concerto in D major, op. 35

I. Allegro moderato – Moderato assai

II. Canzonetta Andante

III. Finale. Allegro vivacissimo

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] 20ページ

TCHAIKOVSKY / Symphony No. 6 in B minor, op. 74 "Pathétique"

I. Adagio – Allegro non troppo

II. Allegro con grazia

III. Allegro molto vivace

IV. Finale: Adagio lamentoso

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協力] 横浜みなとみらいホール (4/27)

[事業提携] 東京芸術劇場 (4/26)

新シリーズ《気楽にクラシック》
スペインへの旅のご案内役

梅田俊明

Toshiaki Umeda



©三浦興一

◇ 4月11日 気楽にクラシック

1984年に桐朋学園大学音楽学部を卒業、86年に同研究科を修了。指揮を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、コントラバスを小野崎充、ピアノと室内楽を三善晃、井上直幸の各氏に師事。83、84年には来日中の指揮者、ジャン・フルネ氏にも学んだ。86年からウィーン国立音楽大学指揮科に留学、オトマール・スイトナー氏に師事し研鑽を積んだ。帰国後、日本センチュリー響（89～92年）、仙台フィル（90～2000年）、神奈川フィル（92～26年）の指揮者を歴任。N響、都響、新日本フィル、日本フィルを始め、国内主要オーケストラとの共演を重ねている。00年4月には仙台フィルの常任指揮者に就任、オーケストラの発展に情熱を注ぎ込み、06年3月までその任を務めた。

01年第1回、および04年第2回仙台国際コンクールでは全ての協奏曲を指揮し、出場者、聴衆、国内外の審査員から絶賛を博した。06年には大ブームとなったテレビドラマ「のだめカンタービレ」に、演奏及び指揮指導で参加し、注目を集めた。

96年1月には南西ドイツ・フィルとスロヴァキア・フィルの定期演奏会に出演、いずれも好評を博した。

的確な棒さばきと音楽に対する誠実な姿勢でオーケストラからの信頼も厚い。桐朋学園大学、東京藝術大学非常勤講師。

常任指揮者カンブルラン
新シーズンの幕開けを飾る

シルヴァン・カンブルラン

Sylvain Cambreling

- ◇ 4月17日 定期演奏会
- ◇ 4月19日 読響メトロポリタン・シリーズ



©読響(撮影:青柳聡)

幅広いレパートリーを綿密に組み合わせた絶妙な選曲と、色彩感あふれる緻密な演奏で圧倒的な評価を確立している読響の第9代常任指揮者(2010年4月就任)。海外では、世界有数のオペラ・ハウスであるシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を12年9月から務めているほか、クラングフォーラム・ウィーン(世界の最先端を行く現代音楽アンサンブル)の首席客演指揮者も兼任している。

1948年フランス・アミアン生まれ。81年から91年までブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、93年から97年までフランクフルト歌劇場の音楽総監督、99年から2011年までバーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を務めた。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、02年からドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招 聘教授を務めている。12年秋、SWR響での長年にわたる活躍、とりわけ教育分野における数多くの創造的な取り組みが高く評価され、ドイツ連邦共和国功労勲章(功労十字小綬章)が授与された。

客演指揮者としては、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、クリーヴランド管、ロサンゼルス・フィル、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、フィルハーモニア管、ウィーン響など、世界の一流楽団と共演している。また、オペラ指揮者としても幅広いレパートリーを誇り、ザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音も数多く、中でもSWR響との《メシアン管弦楽作品全集》は世界中で高く評価されている。読響ともこれまでに《幻想交響曲／クーブランの墓》《ペトルーシュカ／フランク：交響曲》《第九》のCDが発売され、好評を博している。

“炎のコバケン”の代名詞
燃えるチャイコフスキー!

小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi

- ◇ 4月26日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇ 4月27日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇ 4月28日 サントリーホール名曲シリーズ



©読響(撮影:青柳聡)

“コバケン”の愛称で親しまれている世界的指揮者。2011年8月より、読響の特別客演指揮者を務めている。1940年、福島県いわき市出身。

東京藝術大学作曲科および指揮科を卒業。74年、第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など、国内外の数々のオーケストラのポストを歴任。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。2010年には、ハンガリー文化大使に就任。11年、文化庁長官表彰受賞。13年、旭日中綬章を受章。

現在、ハンガリー国立フィル、日本フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の首席客演指揮者、東京藝術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院(ハンガリー)名誉教授。12年7月からは、東京文化会館の音楽監督も務めている。

02年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用され、大統領臨席のもと、スメタナ作曲《我が祖国》をチェコ・フィルと演奏し、スメタナホール満場の聴衆から長いスタンディング・オベーションを受けた。

その後、チェコ・フィル、マリインスキー・ヤング・フィル、ハンガリー国立フィル、アーネム・フィルの日本公演や、日本フィルのヨーロッパ公演を指揮し、好評を博した。多くのCD、DVDをリリースしているが、特に公演からわずか1か月という異例の早さで昨年5月にCD化された読響との《我が祖国》(ライブ録音)は、本人をして「これまでの人生で最高」と言わしめるほどの充実した演奏で、多方面で絶賛を博している。

日本、アメリカ、ヨーロッパ
世界を虜にした実力派ヴァイオリニスト

川久保 賜紀

Violin
Tamaki Kawakubo



©Yuji Hori

米ロサンゼルス出身。5歳からヴァイオリンを始め、R. リプセツト、D. ディレイ、川崎雅夫、Z. ブロンの各氏に師事。2001年サラサーテ国際ヴァイオリン・コンクール優勝、02年にチャイコフスキー国際コンクール最高位入賞と併せてロシア作曲家協会による「現代音楽の優れた演奏に対する特別賞」を受賞。ロサンゼルス・フィル、クリーヴランド管、MDRライブツィヒ放送響、ウィーン・トーンキュンストラ管など、内外のオーケストラと数多く共演している。CDはエイベックス・クラシックスより4枚のソロ・アルバムをリリース。04年出光音楽賞、07年S&R財団ワシントン・アワード賞をそれぞれ受賞。

読響とは02年以降、数多く共演している。使用楽器は、1779年製ジョヴァンニ・バティスタ・グアダニーニ（S&R財団貸与）。

オフィシャル・ウェブサイト <http://www.tamaki-kawakubo.com/>

◇ 4月11日 気楽にクラシック

カンプルランの信頼も厚く
欧州で高い人気を誇るピアニスト

ニコライ・デミジェンコ

Piano
Nikolai Demidenko



©Kirill Bachkurov

ロシア出身、欧州で活躍する“ピアノの詩人”。グネーシン音楽大学で学んだ後、モスクワ音楽院でバシュキーロフに師事。1990年からはイギリスを拠点として、国際的に活躍している。これまでにテミルカーノフ、ノリントン、フェドセーエフら一流指揮者とともにロンドン響、サンクトペテルブルク・フィル、フランス国立管、ブダペスト祝祭管など世界有数のオーケストラと共演を重ねるほか、「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」（ワルシャワ）をはじめ、ニューヨーク、オスロ、シンガポールなどで音楽祭に参加している。CDも多数リリースし、グラモフォン・アワードやドイツ・レコード批評家賞などを受賞している。

読響とは2010年7月にカンプルランの指揮で初共演し、絶賛を博した。今回が2度目の共演となる。

◇ 4月17日 定期演奏会 ◇ 4月19日 読響メトロポリタン・シリーズ

カンプルランの指名で読響初登場
世界を魅了するコロラトゥーラ

ローラ・エイキン

Soprano
Laura Aikin



©Fabrizia Costa

アバド、バレンボイム、ブーレーズ、ムーティ、ドホナーニ、アーノンクールら、世界的巨匠たちと共演し、絶賛されているアメリカ人ソプラノ。3オクターブを超える声域と魅惑的な存在感を併せ持ち、バロックから現代音楽まで広大なレパートリーを誇る。ウィーン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、メトロポリタン・オペラ、ベルリン州立歌劇場、パリ・オペラ座、ザルツブルク音楽祭など、世界のひのき舞台上で、R. シュトラウス〈ナクソス島のアリアドネ〉ツェルビネッタ役、ロッシーニ〈タンクレディ〉アメナイーデ役をはじめ、ベルク〈レル〉タイトルロールやツィンマーマン〈兵士たち〉マリー役などといった近現代オペラの難役も幅広くこなし、聴衆を魅了し続けている。

読響とは今回が初共演。

◇ 4月17日 定期演奏会 ◇ 4月19日 読響メトロポリタン・シリーズ

情熱的かつ叙情的な個性を発揮する
妖精のようなヴァイオリニスト

アレクサンドラ・スム

Violin
Alexandra Soumm



©Dan Carabas

ロシア・モスクワ生まれのフランス人ヴァイオリニスト。5歳でヴァイオリンを始め、後にウィーンでボリス・クシュナー教授に師事した。2004年にはユーロヴィジョン・コンクールで第1位を獲得。現在はパリに拠点を移し、フリーベック・デ・ブルゴス、ブロムシュテット、ヴェデルニコフといった指揮者たちとともにイスラエル・フィル、hr（フランクフルト放送）響、ロシア・ナショナル・フィルなどと共演を重ね、国際的なキャリアを歩んでいる。また、13年1月に新しく創設された「エル・システム・フランス」では後進の指導にもあたっている。

読響とは今回が初共演。使用楽器はロンドン・ミュージック・マスター・アワード受賞の一部として同地のフローリアン・レオンハルト商会から貸与されている1785年製ジョヴァンニ・バティスタ・グアダニーニ。

◇ 4月26日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇ 4月27日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 4月28日 サントリーホール名曲シリーズ

気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～

第1回
《憧れの国、スペイン》

4.11 (金)

毎回ひとつの国をテーマにして、ヨーロッパの国々を巡る本シリーズ。第1回は南の国「スペイン」です。“憧れの国”と題されているように、サラサーテ以外はフランスとロシアの作曲家の作品。異国への想いがこめられた音楽が中心となり、曲それぞれが多少の関連性を有しています。指揮は、ドラマ「のだめカンタービレ」にも参加した、スタイリッシュな実力派・梅田俊明。そしてチャイコフスキー・コンクール最高位の名ヴァイオリニスト、川久保賜紀が美しい華を添えます。ナビゲーターの中井美穂に、指揮の梅田俊明も加わって、魅力や聴きどころをご紹介します。19時30分からのトークを聞けば興味も倍増。心が沸き立つ情熱の音楽を満喫しましょう！



ナビゲーター

中井 美穂 Miho Nakai

アナウンサー

ロサンゼルス生まれ。1987年～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。

現在、「鶴瓶のスジナシ」(CBC,TBS)、「タカラヅカ・カフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディア・パートナー」(FM東京)にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。

演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。

2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。

幕開けは、フランス近代音楽の先駆者エマニュエル・シャブリエ (1841～94) の代表作、**狂詩曲〈スペイン〉**。作曲に専念するため39歳で役人を辞めたシャブリエは、2年後の1882年、スペインへ旅行しました。翌年、その印象をもとに書いたのがこの曲。民俗舞曲のリズムを生かした、明るく躍動的な音楽は、スペインの大作曲家ファリャから「いかなるスペイン人も書けないほど見事で正しい」と賞賛されました。3拍子なのに2拍子のように聴こえる面白さや、トロンボーン等が効果を上げる華麗な色彩感は格別。こうしたテストは、ラヴェルに大きな影響を与えました。

次は、その影響を受けたモーリス・ラヴェル (1875～1937) の**〈道化師の朝の歌〉**。近代フランスの才人ラヴェルは、スペインにまたがるバスク地方出身の母をもち、自身も当地で生まれました。それゆえ同曲や〈スペイン狂詩曲〉〈ボレロ〉ほか数多いスペイン系の作品には、異国趣味よりも強い、親密な憧憬が反映されています。同曲はピアノ曲集〈鏡〉第4曲の管弦楽編曲。打楽器が活躍するリズムカルな主部と、ファゴットのソロに始まるけだるい中間部のコントラストが、道化師の明と暗を表わします。

ここで、本国スペインの大ヴァイオリニスト&作曲家、パブロ・デ・サラサーテ (1844～1908) の濃厚なヴァイオリン作品を2曲。最初の**〈アンダルシアのロマンス〉**は、本来ピアノ伴奏の〈スペイン舞曲〉全8曲中の第3曲。南部アンダルシア地方の二つの民謡が変奏されていく、官能的なロマンスです。2曲目**〈カルメン幻想曲〉**は、もちろんビゼーの歌劇〈カルメン〉に基づく編曲物。“アラゴネーズ”“ハバネラ”“第1幕のカルメンの鼻歌”“セギディーリャ”“ジプシーの歌”の旋律がリレーされ、さまざまな超絶技巧が見せ場を作ります。

今度は、その原曲を含む音楽。フランスの天才ジョルジュ・ビゼー (1838～75) の**〈カルメン〉第1組曲**です。人気オペラ〈カルメン〉は、純真な若者ドン・ホセと奔放な女カルメンに闘牛士などが絡む、セビリアを舞台にした恋の悲劇。今回は、スペイン色溢れる名曲満載のこの傑作から、“前奏曲 (第1幕前奏曲後半の重い部分) ～アラゴネーズ (民俗的な第4幕間奏曲)”“間奏曲 (フルートのソロが美しい第3幕間奏曲)”“セギディーリャ (第1幕でカルメンがホセを誘惑する歌)”“アルカラの竜騎兵 (ファゴットが活躍する第2幕間奏曲)”“闘牛士 (おなじみの第1幕前奏曲前半)”の5曲が演奏されます。



締めくくりは、ロシア国民楽派ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）の作品。オリエンタルな〈シェエラザード〉と並ぶ異国趣味の名作〈スペイン奇想曲〉です。“アルボラーダ”“変奏曲”“アルボラーダ”“シェーナとジプシーの歌”“ファンダンゴ・アストゥリアーノ”の5部分を続けて演奏。主題はすべてスペイン

民謡が用いられ、カスタネット等の打楽器を駆使して当地の雰囲気を描かれます。ちなみに“アルボラーダ”は「朝の歌」を意味し、〈道化師の朝の歌〉の原題にも用いられています。ヴァイオリンをはじめとする各楽器のソロが活躍するのも特徴。“管弦楽法の達人”のカラフルなサウンドが耳を奪います。

シャブリエ 狂詩曲〈スペイン〉

作曲：1883年／初演：1883年11月4日、パリ／演奏時間：約8分

ラヴェル 道化師の朝の歌

作曲：ピアノ版＝1905年、管弦楽版＝1918年／
初演：ピアノ版＝1906年1月6日、管弦楽版＝1919年5月17日、パリ／演奏時間：約8分



サラサーテ アンダルシアのロマンス 作品22-1

作曲／初演：不明／演奏時間：約5分

サラサーテ カルメン幻想曲 作品25

作曲／初演：不明／演奏時間：約12分

ビゼー〈カルメン〉第1組曲

作曲：1872～74年／初演：1875年3月3日、パリ（いずれも歌劇）／演奏時間：約12分

リムスキー＝コルサコフ スペイン奇想曲 作品34

作曲：1887年／初演：1887年10月31日、ペテルブルク／演奏時間：約15分

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせ だいすけ・音楽学、音楽評論

第536回
定期演奏会

4.17 〈木〉

第7回
読響メトロポリタン・シリーズ

4.19 〈土〉

シェーンベルク 弦楽のためのワルツ

作曲：1897年？／初演：2003年5月1日、メードリング（ウィーン郊外）／演奏時間：約16分

若き日の作曲家が未来を見つめた、知られざる佳曲

アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）についての文章を繙くと、「シェーンベルクはいつシェーンベルクになったのか？」というフレーズにしばしば出くわす。12音音楽の体系を完成させ、それに基づいた創作で後世に名を遺す作曲家になった瞬間はいつか、という問いなのだろう。

父親の死後に勤めた地元の銀行が21歳のときに倒産して以来、音楽の道を志したシェーンベルクが、唯一師と仰いだアレクサンダー・ツェムリンスキーと出会ったのは、1896年に発足したウィーンのアマチュア音楽団体「ポリュヒュムニア」を介してであった。〈弦楽のためのワルツ〉は、この団体の演奏会のために、同団体の発足直後に作曲されたので

はないか、と推測されている（年代は筆跡や五線紙の鑑定から1897年初頭～秋頃とされている）。

全体はワルツ11曲のごく簡素な小曲の集合体として構想されたと考えられるが、11曲目は未完成のまま遺された（今回も10曲のみ演奏）。いずれも冒頭の旋律が反復記号で繰り返されるのが共通する（第6、9、10曲を除く）。第9曲など、長調と短調の境がわざとあいまいにされている曲もあり、その視線ははやくも音楽の遠い将来を見据えている。この時からすでに、二十歳代前半のシェーンベルクは「シェーンベルク」であったのだろう。

楽器編成／弦五部

リスト ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調

作曲：1830?～35, 39, 49, 53年／初演：1855年2月17日、ヴァイマル／演奏時間：約17分

新しい時代へと向かう、新しい「協奏曲」のかたち

超絶技巧を駆使したピアニストとしてのイメージが先行するフランツ・リスト（1811～86）にとって、その転機は1848年にヴァイマルの宮廷楽長になった後に訪れる。同地でリストは、オーケストラの指揮者として、管弦楽曲やオペラの指揮も積極的に手がけた。自身で文学・絵画作品などに想を得た単一楽章の交響詩というジャンルを創始するにあたっては、このヴァイマルにおいて実際のオーケストラに接した経験が大きく影響している。

1830年代、40年代に、ピアノのための各種作品を山ほど書いていたリストではあったが、そのピアノを独奏とした協奏曲をはじめて公にしたのは、このヴァイマルに着任した後のことだった。この作品の着想そのものは1830年代前半に遡ることができ、35年には初稿が完成している。その後、39年に全体を止めずに演奏するかたちへの改訂が行われ、49年にはほぼ現在知られている最終稿が仕上がっている。初演は55年にベルリオーズの指揮、自身の独奏によってヴァイマルで行われた。

この改訂の主な意図は、複数の楽章から成る曲を、共通する主題で結び合わせ、曲全体に統一感をもたらす「循環形式」を採り入れようとしたことにある。各種解説によっては楽章数が三つ、ないしは四つと分かれるが、これは終止線（楽曲の終わりを示す小節線）が第1楽章と第3楽章の終わりにしかなく、ふたつの部分から成る第2楽章の終わりがいずれも複縦線（楽曲の区切りを表わす二本の細い小節線）であることから、これをもって第2楽章をふたつに分けて数えるかどうかによる。曲後半で活躍するトライアングルは49年の改訂時に加えられた。協奏曲としては大変斬新な、より華やかな演奏効果を上げるための工夫の一環ととらえるべきだろう（それゆえに、「トライアングル協奏曲」と揶揄されることにもなったのはあるが）。改訂時、リストはこの曲を〈交響的協奏曲〉と題した。ただの協奏曲ではなく、スケルツォ楽章を含む小規模な交響曲ととらえることも可能なわけで、リストが既存の形式を融合し、新たな楽曲の可能性を模索しようとしたことが窺える。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部、独奏ピアノ

マーラー 交響曲 第4番 ト長調 〈大いなる喜びへの賛歌〉

作曲：1892年（第4楽章）、1899-1901年（第1～3楽章）／初演：1901年11月25日、ミュンヘン／演奏時間：約52分

器楽と声楽の衝突が生み出す、世紀末の皮肉とパロディ

1897年に就任したウィーン宮廷歌劇場指揮者という激務をぬうようにして作曲され、1901年に初演されたグスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第4番。その大胆な作曲上の工夫は、終楽章の形を先に決めることによって、それに先立つ楽章の数と構成を後から決めてしまう、という発想の転換であった。マーラーは前作・交響曲第3番の第7楽章に、歌曲集《少年の魔法の角笛》からの“天上の生活”を置くはずだった。しかしこのアイデアは断念し、代わりに次の交響曲の最終楽章にこの曲を置くことを先に決め、先行する三つの楽章が後から付け足された。

第1楽章冒頭で響き渡る鈴（マーラーは「道化の帽子についた鈴」と呼んだ）を伴う旋律は、最終楽章で主に歌詞の間奏として頻繁に用いられているものをそのまま転用している。タイトルには「ト長調」と謳われているにもかかわらず、音楽はやや離れた「口短調」から始まるのも、やや思わせぶりか。**第2楽章**では、「死の舞踏」（調弦を変えたヴァイオリン

・ソロが活躍）を模したレントラー（オーストリア民謡）の旋律がきこえ、**第3楽章**の変奏曲では、あわただしく、そしてアイロニカルな変奏部分が、曲全体に不安感を与えている。これは後半の壮大なファンファーレと見事な対照をなしており、ブルックナーの交響曲第9番の第3楽章と同様、このアダージョ楽章が全体の終結部として機能していると考えられよう。エピローグ的に置かれた既存の**最終楽章**“天上の生活”の歌詞では、聖ヨハネの仔羊（イエス・キリストのこと）にヘロデが目をつけ、それを天使たちが屠殺してしまう。天国のほのぼのとした様子を描いた詞のように見えるが、その中には鋭い皮肉とパロディが満ちている。最後はハーブとコントラバスの響きだけが不気味に、消えゆくように曲を締めくくり、派手な終結はついぞ現れぬまま。この後、マーラーは声楽を伴わない純粋な交響曲を立て続けに3曲手がけることで、器楽曲としての交響曲に残された最後の可能性を汲み尽くそうとする。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、タムタム、鈴）、ハーブ、弦五部、ソプラノ独唱

プログラムノーツ
PROGRAM NOTES

飯尾洋一
いいお よういち・音楽ライター

第165回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 4.26 〈土〉	第71回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 4.27 〈日〉	第570回 サントリーホール名曲シリーズ 4.28 〈月〉
--	---	--

チャイコフスキー
ヴァイオリン協奏曲

ニ長調 作品35

作曲:1878年／初演:1881年、ウィーン／演奏時間:約33分

初演が酷評されるも、やがて名作として真価を認められた協奏曲

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは1840年、ロシアのカムスコ＝ヴォトキンスクに生まれた。幼少時より楽才をあらわすが、法律学校に学び、1859年より法務省に事務官として入省する。1863年に役所を退所してペテルブルク音楽院に入学し、職業音楽家への道を歩む。バラキレフをはじめとするペテルブルクの「五人組」との交流から刺激を受け、民俗的な素材を作品に取り入れる一方で、音楽院での教育で身に着けた西欧的なスタイルを創作の基盤として独自の作風を獲得した。1877年以降、14年間にわたって富豪の未亡人メックから多額の年金を受け、音楽院での教職を辞して創作に専念する。1877年には結婚とその破綻により精神的危機を迎えるも、西欧に一時逃避して回復。交響曲やバレエ音楽、オペラなどの分野に次々と傑作を発表し、外国への演奏旅行にもたびたび

出かけて国際的な名声を獲得したが、1893年の交響曲第6番〈悲愴〉初演後にペテルブルクで急逝した。

1878年、スイスのクラランで静養するチャイコフスキーのもとを、ヴァイオリニストである若い男友達、ヨシフ・コーテクが訪れた。コーテクはメック夫人から託されたラロの〈スペイン交響曲〉などの楽譜を持参する。ラロの作品に触発されたのか、チャイコフスキーは作曲中のピアノ・ソナタを中断し、新たにヴァイオリン協奏曲の作曲に向かった。作曲家の創作意欲は激しく亢進したようだ。着想からスケッチが完成されるまでに要した期間は、わずか12日間。その後、コーテクと弟モデストに不評だった第2楽章を書き直してスコアを仕上げていく。独奏パートの技法についてはコーテクの助言が取り入れられた。作曲家は「彼がいなかったらなにもできなかった」

と手紙に書き残している。

作曲の筆は順調に進んだが、初演には一苦労が待ち構えていた。当時の大家レオボルト・アウアーは演奏不可能な作品として初演を拒否。代わって作品の真価を認めたモスクワ音楽院教授のアドルフ・プロツキが、1881年にウィーンでハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルとの共演で初演を果たしている。

この初演は聴衆からの野次と批評家の酷評に迎えられた。著名な批評家エドゥアルト・ハンスリックは、「悪趣味なものを作ることにかけては並の才能ではない」「終楽章に安酒の匂いを感じる」と、作品を切り捨てた。また、別の批評では「悪臭を放つ音楽作品」とまで書かれてしまう。この楽曲に対する現在の高評価を考えると不思議にも思えるが、音楽の伝統を誇るウィーンの地でロシア人が協奏曲という西欧的な作品を発表したことに対して、少なからず偏見があったにちがいない。

しかし、プロツキがヨーロッパ各地で繰り返し演奏することで作品の評価は次第に高まり、後にアウアーも前言を翻して自身のレパートリーに加えることになった。現在では、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスのヴァイオリン協奏曲と並ぶ名曲として、屈指の人気

を誇っている。

第1楽章はアレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ。簡潔な序奏に続いて、独奏ヴァイオリンが悠然と情感豊かな第1主題を奏でる。高潮した後、穏やかで夢見るような第2主題が独奏ヴァイオリンにより導かれる。起伏に富んだ展開部を経て、華麗で技巧的なカデンツァが続く。

第2楽章はカンツォネッタ、アンダンテ。カンツォネッタとは「小さな歌」の意。管楽器のみによる賛美歌風の序奏に続いて、独奏ヴァイオリンが哀切な旋律を歌う。中間部ではほのかな明るさを感じさせるが、ふたたびメランコリックな主題が回帰する。消え入るように楽章を閉じ、そのまま切れ目なく第3楽章に続く。

第3楽章はフィナーレ、アレグロ・ヴィヴァーチッシモ。爆発的な総奏で開始され、躍動感あふれる民俗舞曲風の主題が続く。濃厚な民俗色と激しいリズムが熱狂と興奮を呼び起こし、独奏ヴァイオリンとオーケストラのスリリングな応酬をともなう。スケールの大きなクライマックスを築きあげる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー

交響曲第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉

作曲:1893年／初演:1893年、ペテルブルク／演奏時間:約46分

あたかも自らへのレクイエムのように初演された最後の交響曲

チャイコフスキーが最後に書いた交響曲は彼の代表作であると同時に、初演のわずか9日後に作曲者が世を去ったという〈白鳥の歌〉でもある。作曲者の急逝の事実を知らずとも、全編に繰り返し登場するため息のような下降音型は、別れの悲しみを強く示唆する。

交響曲第6番〈悲愴〉が作曲されたのは1893年のこと。作曲者は53歳を迎えようとしていた。この年、ロンドンで自作の交響曲第4番を指揮し、ハンブルクでは自作オペラ〈イオランタ〉の上演を観るなど、チャイコフスキーは精力的な活動が続けていた。ロシアの皇族で親友でもあったコンスタンチン大公からレクイエムの作曲を勧められるが、チャイコフスキーは「いま書いている交響曲、特に終楽章にはレクイエムの気分があふれています」と答えている。後にコンスタンチン大公は交響曲第6番のリハーサルに立ち会い、「まさにこれはレクイエム」と作曲者の手を握って、涙を浮かべたという。

初演にはコンスタンチン大公はじめ、リムスキー＝コルサコフ、グラズノフ、

ラフマニノフらが臨席し、音楽界のみならず各界の名士たちが集った。チャイコフスキー自身の指揮による演奏は、聴衆に深い感銘を与え、終楽章の最後の音が消えてもなおしばらくの沈黙が訪れ、やがて大喝采が寄せられたと伝えられる。

第1楽章はアダージョ～アレグロ・ノン・トロッポ。作曲者がこの作品について語った標題は「人生について」の一言だが、冒頭のアダージョの暗鬱な主題からすでに悲劇的結末は予告されている。楽章を通して強い緊迫感が貫かれ、激情が奔流となって押し寄せる。

第2楽章はアレグロ・コン・グラツィア。珍しい4分の5拍子によるワルツ。

第3楽章はアレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。スケルツォ風の楽想と勇壮で輝かしいマーチが組み合わせられる。ブラス・セクションの咆哮とともに歓喜と勝利を迎える。

第4楽章はフィナーレ、アダージョ・ラメントーソ。前楽章の歓喜と勝利が幻であったかのように、綿々と紡ぎだされる嘆きの歌。悲劇的情感を大きく高ぶらせた後、最後は消えゆくように曲を閉じる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タムタム）、弦五部